

パスカルの方法論

— 言語・人間・社会 —

佐 藤 誠

事物の認識様式は、視覚、聴覚、触覚などの感覚的な能力ばかりではなく、判断し検証する理知的な能力にも依存している。それらの能力は、決して機械的に適用されるのではなく、通常、何をいかに知なのかという主体の問いかけに応じて、適用方法が異なる。すなわち、知る対象に対する主体の関心度により、認識する働きそのものが、様々なカテゴリーに分類されることになる。したがって、事物を知るという行為は、その事物のどのような部分をいかに知ろうとするのかという主体の姿勢によって、条件づけられるのであり、そうした主体の関心度を無視して、事物の認識様式を一義的に想定しうるわけではない。実際、事物の属性は、物質的な性質、用途的な性質、価値的な性質などのように、様々な特性に分類される。その場合、どのような状況における性質をいかに知ろうとしているのかを明らかにしなければ、事物の認識様式のあり方を正確に解明することはできないだろう。知る主体の関心度が、こうして、事物を認識する仕方がある程度まで限定していることになる。

しかしながら、たとえ認識する対象が限られているとしても、それを説明する表現手段が不十分である場合、認識対象を他者に正しく伝達することは、困難とならざるをえない。

そこで本稿では、パスカルの方法論を取り上げて、人間社会の様々な現象を、彼がどのように捉えていたのかを考察することにした。そうした考察を通して、人間や社会に対するパスカル独自の見解を明らかにし、彼

八〇

が自己の方法論をどのように認識対象に適用しようとしていたのかを検討する段取りである。

I 幾何学的精神の方法論

パスカルは、『真空論序言』で、理性と権威という2種類の認識原理を提示している。まず、理性は、具体的な検証に基づく推理能力が重視される学問分野で、主要な働きをする。たとえば、「幾何学、算術、音楽、物理学、医学、建築」などのように、「実験と推理の領域に属する」⁽²⁾問題を解明するためには、理性による認識方法が適用される。他方、直接に検証することができない学問分野では、書物による権威が、事物を認識する有効な手段となる。過去から伝えられた書物の中に、権威そのものの信憑性を求めねばならないので、そこに読者の恣意的な推理を介入させることはできない。実際、神学、歴史、地理などの領域では、感覚器官や推理能力によって、事物の真偽を判断することが不可能である以上、書物に認められる権威だけが、真なる認識へ至る手掛りとなる。⁽³⁾

ところで、理性による認識は、常に具体的な検証作業を伴う。すなわち、真なる認識は、確固とした不変な指標を必ずしも含んでいるわけではなく、検証された事実に応じて、真偽の判定基準は変わらざるをえない。⁽⁴⁾理性による認識は、その意味で、蓋然的な性質を備えていることになる。ただ、実験や実証的な検討を通じて確認された領域内でのみ、真なる認識の妥当性ある程度まで保証することができるわけである。したがって、理性による認識は、決して万能ではなく、むしろ、相対的な事柄を提示するに過ぎないことがわかる。

それでは、そのような領域で確証された真なる認識は、どのようにして証明することができるのであろうか。言語を媒介とした理性的な認識作用が問われるのは、そうした事態の中に他ならない。パスカルが取り上げる幾何学的な論証方法は、事物の本性を解明するのではなく、「既に発見さ

れた真理を証明し⁽⁵⁾、しかもその証明過程に誤謬が認められないように論証する方法であることに注意する必要がある。したがって、既に獲得された真理の信憑性を、他者に明確に示すことが要件となり、そこでは、言語による説得方法が重視されることになる。その意味で、「言語は、常に意味の伝達であると同時に、存在の伝達——すなわち、説得と対話——であるだろう⁽⁶⁾」という指摘は、幾何学的な論証方法の要点を捉えていると言える。実際、真理の証明過程を明らかにするためには、何よりも言語の論理的な使用を検討しなければならない。

さて、パスカルは、真理の証明において、幾何学的な精神を特徴づけている原理を、次のような3段階に要約している。まず第1に、証明の曖昧さや誤解をできる限り避けるためにも、用語を正しく定義することが必要不可欠な課題となる。すなわち、「明確な定義によって使用されるべき用語を定義する⁽⁷⁾」ことは、命題を証明する前提条件であるといっても過言ではない。明瞭で正確な定義は、こうして、幾何学的論証方法の第1段階を表すことになる。第2に、「問題となっている事柄を証明するために、明瞭な原理やまたは公理を提示すること⁽⁸⁾」と、記されているように、正確に定義された用語で作り出された明瞭な公理が重視される。公理は、証明の展開に対して堅固な支柱を提供する以上、定義と同様に重要な役割を果たすことは言うまでもない。そして第3に、証明が、幾何学的論証方法の特徴づけることになる。したがって、「証明において、定義されたものの代わりに、常に定義そのものを頭の中で置き換えること⁽⁹⁾」が求められる。

こうしてみると、言語の正確な使用方法が、証明過程では、重要な位置を占めていることがわかる。すなわち、「定義の論理は、証明の論理に先立つ意味論である⁽¹⁰⁾」と、見なすこともできよう。幾何学的精神の基本原則では、定義で使用される言語の意味をいかに考察すべきかを知ることが前提条件となるわけである。

パスカルは、その場合、定義、公理、証明について、それぞれ次のような規則を指示していることに注目しなければならない。まず、「定義に関

する必要な規則⁽¹¹⁾」として、「少々不明瞭な、または、定義のない曖昧な
 かなる用語も認めないこと⁽¹²⁾」と、述べられ、さらに、「定義では完全に知
 られているか、または既に説明された用語しか使用してはならない⁽¹³⁾」こと
 を要求している。また、「公理に関する必要な規則⁽¹⁴⁾」では、「公理では、完
 全に明瞭な事柄しか求めてはならないこと⁽¹⁵⁾」を、パスカルは指示している。
 そして「証明に関する必要な規則⁽¹⁶⁾」としては、「証明には、それ自身非常
 に明瞭な公理か、または既に証明されたか、容認された命題だけを用いて、
 あらゆる命題を証明すること⁽¹⁷⁾」が、指示され、しかも「用語を限定してい
 るか、または説明している定義を、頭の中で置き換えずに、決して用語の
 曖昧さを乱用してはならない⁽¹⁸⁾」ことに、パスカルは注意を促している。

こうした3つの規則は、何よりも、明瞭で正確な用語を用いて、「説得
 力があり、堅固な、要するに幾何学的な証明⁽¹⁹⁾」を改良することに役立つわ
 けである。したがって、それらの規則は、論証過程における言語の意味論
 的使用方法与密接に関連していると考えられる。そこで、幾何学的な論証
 方法の効力を発揮するためにも、完全に明瞭な用語をいかに定義するのか
 を考察することが必要となる。

パスカルによれば、定義は、事物の本質を示すのではなく、「意味が知
 られていない言葉の類義語を与える⁽²⁰⁾」役割をする。したがって、言葉の名
 目的な定義が、幾何学的な論証方法の主要な課題となる。「定義は、名づ
 けられる事物を指し示すためだけに作られるのであり、その事物の本性を
 表すわけではない⁽²¹⁾」以上、ただ適切な用語によって事物を定義することを
 考慮すれば十分であろう。ある事物を定義することにより、その事物の本
 性が即座に明らかになるわけではない。名目的な定義は、こうして、「完
 全に知られているか、または既に説明された⁽²²⁾」用語によって、あらかじめ
 定義されることになる。事物の認識が問題となるのは、あくまで言葉の領
 域に限定されるわけである。したがって、定義の働きは、複雑な証明を明
 確にして、「あらゆる困難なことや曖昧な事柄⁽²³⁾」を斥けることにあるので、
 名目的な定義そのものの信憑性を検証することはできない。すなわち、明

瞭な言葉を用いさえすれば、事物の本性を定義することができるのである。「定義ほど自由なものはない」⁽²⁴⁾というパスカルの指摘は、そのような思考過程を表していると考えられる。しかしながら、名目的な定義は、必ずしも事物のすべての性質に適用されるわけではない。「定義をしたい最初の用語は、その用語に役立つようなそれ以前の用語を想定することになり」⁽²⁵⁾、その結果、「最初の用語に到達することが決して生じない」⁽²⁶⁾事態に陥るからである。すべての事物を定義して、証明することが不可能であるのは、そうした理由に基づいている。そして、そこにこそ、名目的な定義に関する障壁を見出すことができる。

それでは、「もはや定義することができない始原語 des mots primitifs」⁽²⁷⁾に出会う場合、名目的な定義の特性は、どのように示されるのであろうか。

パスカルは、空間、時間、運動のような始原語を理解するためには、「自然性」la nature⁽²⁸⁾の働きに求めることを提案している。言葉の循環論法に陥らないためにも、「自然性」による始原語の理解が要件となるわけである。「自然性」は、こうして、理性や推理能力を補う認識能力を備えていることになる。この「自然性」は、また、事物を直観的に捉える「心情」le coeurと同じ認識作用を表している。実際、パスカルは、『パンセ』の中で、「私たちは、理性によるばかりではなく、心情によっても、真理を認識する。そして、後者（＝心情）を通して、私たちは、最初の諸原理 les premiers principes⁽²⁹⁾を知るのである」と述べて、心情による認識方法を提案している。その場合、「最初の諸原理」は、「空間、時間、運動、数などに認められる」⁽³⁰⁾と記されているので、「始原語」に含まれる諸原理と見なしてよい。そして、パスカルは、「理性が拠り所としているのは、心情と直観の認識であり、理性は、その認識に基づいてあらゆる自己の論証を打ち立てている」⁽³¹⁾と、説明するのである。すなわち、心情による認識方法は、理性では捉えられない「最初の諸原理」が見出される論証過程の中で、重要な働きをすることになる。したがって、心情による認識は、決して神秘的な特性を備えているのではなく、「1種の直接的な直観能力であ

り、推理的な論証に相反し、しかもそれに先立つ能力である⁽³²⁾と考えることができる。心情と理性は、こうして、パスカルの認識様式では、相互補完的な働きをすることになる。パスカルはまた、定義することができない言葉に対して、「自然の光」la lumière naturelle と推論的な証明との相関関係を重視して、「要するに、これらの用語は、自然の光か、あるいはまた、幾何学が提供する定義によって完全に理解することができる⁽³³⁾」と述べている。そこで、パスカルの言語観を明らかにするためにも、定義することができない言葉をどのように把握すべきかが問われねばならない。

パスカルは、時間を例に取り上げて、なぜ始原語を定義する必要がないのかを、次のように説明している。すなわち、誰でも時間の意味をあらかじめ了解しているので、新たに時間という言葉で定義することはできない。確かに、時間の本性については、様々な見解がある。しかし、皆が知っているのは、その本性ではなく、実は、「名前と事物との関係に過ぎない⁽³⁴⁾」と、パスカルは指摘する。その関係こそ、皆が直観的に了解しているのであり、決して事物の本性ではない。したがって、通常、名目的な仕方では、時間のような始原語は理解されることになる。幾何学的な論証方法では、こうして、自然の光によるにせよ、または、推理的な証明によるにせよ、定義する対象と定義された用語との関係だけを捉えることができる。ところが、その関係は、名目的な定義に属しているので、事物の本質を包括的に理解することは不可能となる。すなわち、定義における意味の一義性を決定したり、また、定義された用語の信憑性を立証することはできない。「定義ほど自由なものはない⁽³⁵⁾」からである。こうしてみると、言葉と事物との関係は、認識の土台としてではなく、むしろ「限界として⁽³⁶⁾」設定されることがわかる。言葉によって明示されたそうした関係は、「証明の中で、定義されたものの代わりに、定義を常に頭の中で置き換える⁽³⁷⁾」ことをしない限り、事物の十全な認識に到達することも、「絶対的な言語体系⁽³⁸⁾」を打ち立てることもできないことになる。しかしながら、たとえ頭の中でそのような置き換え操作が完全にできたとしても、言語による認識は、相対的

で不完全な認識にならざるをえない。幾何学的な認識方法では、発見された真理の本性を明確にすることも、事物に内在する本質を解明することもできないからである。

したがって、推理的な論証に基づく言語による認識は、事物の真偽を明確に判断する「不動の視点」⁽³⁹⁾を提供するわけではないので、認識方法としては、非常に不十分な手段となる。言語を用いて自由に用語を定義することは、決して確固とした認識を基礎づけることにはならないのである。確かに、パスカルは、事物の認識に対して言語の普遍的な特性を認めているわけではない。しかし、幾何学的な論証方法は、既に獲得された真理を証明するためには、有効な手段を示していることに留意しなければならない。その論証方法に属している「定義不能な理論」⁽⁴⁰⁾は、「定義を必要とする事柄だけを定義するという最初の点で出会うすべての誤謬を避ける」⁽⁴¹⁾利点を備えているからである。実際、パスカルは、幾何学的精神によって特徴づけられる論理的秩序について、「人間の世界で最も完全なこの秩序は、すべてを定義し、すべてを論証することも、また何も定義せず、何も論証しないところにも存在せず、すべての人に理解されている明白なことを定義せず、その他の一切を定義し、またすべての人に知られている一切のことを定義せず、その他の一切を定義するという、この中間にとどまっている se tenir dans ce milieu」⁽⁴²⁾と説明している。

こうしてみると、幾何学的な論証方法は、すべてを定義したり証明することをしないために、決して「完結した秩序」⁽⁴³⁾を含んでいるわけではないけれども、「人間の到達しうるいっさいの完全さを備えている」⁽⁴⁴⁾ことは、認めねばならない。それは、人間の理性的な能力を必ずしも貶めることではない。むしろ、「理性の最後の歩みは、理性を越えるものが無限にあることを認めることにある」⁽⁴⁵⁾という文章が示しているように、理性の限界を知ることは、人間の認識能力を正確に捉えることにつながるのである。幾何学的な論証方法は、その意味で、理性の無力さを示すのではなく、人間の認識能力を正しく理解することに役立つことがわかる。

幾何学的な秩序が、真理の証明に関して「中間にとどまっている」ことは、同時にまた、極大と極小という二つの無限にいずれも到達することができない人間の能力を示唆している。パスカルは、それらの無限を、「理解すべきものではなく、驚嘆すべきものである」⁽⁴⁶⁾と述べて、自然界における人間の位置を明らかにするのである。すなわち、幾何学的な論証方法は、限定された領域だけに適用されるために、逆に自然界における人間の認識能力を正当に評価する契機をもたらすことになる。

II 弁証法的認識原理の基本的問題

人間社会の仕組を理解するためには、その仕組を支えている潜在的な価値規範を考慮に入れる必要がある。しかし、その価値規範と同じ次元にとどまる発想を保持する限り、人間社会の様々な現象を全体として捉えることは、困難である。そこで、価値規範の特性をできる限り正確に把握するためにも、価値規範そのものを越える視点に立つことが求められる。人間社会の諸現象を解明するために、新たな方法論的視座が想定されるのは、そうして場面に他ならない。その際、現実社会の問題点を明らかにするために、パスカルは人間社会をどのように考えていたのかを検討することが前提条件となる。

そこでまず、個体的存在としての自己に関する認識様式を分析し、パスカルが、自己の中にいかなる人間の様相を見出し、それがどのようにして他者に関わりあっているのかを考察することにする。自己が自己を知る場合、自己の存在がどんな視点から眺められ、そして自己の特性が何に由来しているのかについて、パスカルは、『パンセ』の中で次のように説明している。⁽⁴⁷⁾すなわち、自己は他者の存在を排除した独立した実体として捉えられているのではなく、他者から見られた存在として、具体的な場面の中で考察されている。⁽⁴⁸⁾しかも、他者から見られた存在であるために、自己の存在は、それ自身で自立しているのではなく、むしろ他者の存在に依存し

た性質を持っている。そうした自己は、どのような様相を示すことになるのであろうか。

パスカルは、自己に属している特性を、身体的性質の中にも、「魂の中にも」⁽⁴⁹⁾求めず、他者によって眺められた「借り物の性質」des qualités empruntées⁽⁵⁰⁾の中に見出している。自己は、それ自体では、どんな存在価値を持つこともなく、他者にとって有用な性質だけが自己の属性と見なされてしまう。他者は、そこでは、自己によって想定された他者であり、現実存在している他者ではない。自己は、どんな性質が他者にとって有用であるのかを実際に知ることはできないからである。こうした場面の中で、「われわれは、他人の観念の中で仮想の生活 une vie imaginaire をしようとし、そのために外見を整えることに努力する」⁽⁵¹⁾ことになる。しかも自己は、想像上の他者に依存しているけれども、自己の性質は、そのような他者を基準にして、自己の内面において形成されることに注意する必要がある。自己のそうした性質は、能動的に他者に対して映し出されることになる。他者に関しても、その様相は、自己の場合と同様である。自己と他者は、こうして、互いに、「関係的・依存的存在」⁽⁵²⁾であり、各々の性質を相互に投影し合うことにより、その存在基盤を維持するわけである。そのような相関関係に置かれた自己は、「私が他者に押しつけるイメージであり、そして他者は、他者と私自身に対して抱く他者に固有なイメージを私に押しつける」⁽⁵³⁾という複雑な様相を示すことになる。

自己の存在が、自己の内部に見出されない以上、自己は確固とした存在ではなく、他者によって支配されやすい不安定な意識を抱くことになる。しかも、「公職や役目」⁽⁵⁴⁾のような性質は、相対的な価値を含む借り物の標識に過ぎず、自己を規定づける様々な特性も、普遍的な価値を持つことはない。すなわち、自己は、それ自体、独立した存在ではなく、偶有的な存在として人間社会の中に置かれているだけである。

独我論的な自意識を排斥された自己は、こうして、「必然的な存在」un être nécessaire⁽⁵⁵⁾ではなく、存在基盤を剥奪された浮遊物となる。このよ

うな性質を備えた自己は、「自分を外部に投げやる事物」⁽⁵⁶⁾に依存する傾向があるために、自己以外の要素で自己自身を規定するわけである。したがって、そこでは、正確な自己認識をすることはもはや不可能となり、自己の属性さえも明確に示すことが極めて困難となる。人間に固有な自然性に対して、パスカルが鋭い批判を投げかけているのも、そのような人間観に起因していると言える。⁽⁵⁷⁾

さて、相互依存的な状態に置かれた自己と他者は、互いに相手に対して自己の性質を映し出すために、その性質は非常に歪められてしまう。そのような現象は、自己中心的な傾向を両者が持つ場合に顕著に見られ、特に「自己愛」Amour-propre と題された断章に詳しく述べられている。

すなわち、自己の性質が他者の中に映し出される時、自己自身は、偶有的で不安定な存在であるために、その性質はありのままに示されるとは限らない。むしろ、他者の意識を気遣うことにより、歪なイメージを相手に対して押し付ける傾向がある。特に、自己中心的な傾向を帯びた存在は、虚偽な性質を表すために、「自己の欠陥を覆い隠す」⁽⁵⁸⁾ことになる。したがって、自己愛から導き出される自己の特性は、いわば誇張された自己の幻影であると言える。そうした幻影が、自己と他者との相互依存的な関係の中で形成されるのであり、他者に対する自己は、「偽装と虚偽と偽善である」⁽⁶⁰⁾様相を呈してくる。両者の間には、その結果、互いに相剋した関係が生じてくるのである。すなわち、両者は共に相手を従属させ、ホップズ的な敵対関係に陥ってしまう。⁽⁶¹⁾パスカルは、そうした状態について、次のように説明している。つまり、「自己は2つの性質を持っている。それはすべてのものの中心になるから、それ自身、不正である。それは、他人を従属させようとするから、他人には不快である。なぜなら、各人の自己は、互いに敵であり、他のすべての自己の暴君になろうとするからである」⁽⁶²⁾と。

自己は、こうして、単に「滑稽な誇張」⁽⁶³⁾として他者の目に映るばかりではなく、他者との敵対関係を引き起こし、しかもあらゆる他者を支配する「暴君になろうとする」傾向を持つ。「自己は憎むべきものだ」⁽⁶⁴⁾というパス

カルの文章は、そのような観点から理解しなければならない。

ところで、そのような相剋的な人間関係は、先に指摘した依存的で偶有的な存在としての人間観と密接に結びつくことに注目する必要がある。自己は、それ自体、決して充足した存在ではないために、他者を従属させることにより、仮象の存在基盤を自己の内部に想定する。しかし、その存在基盤は稀薄であるために、自己は、本当の姿を他者に対して覆い隠し、誇張された虚偽の自己をそれに代用することになる。人間のあり方に関する依存性と相剋性は、こうして、いわば表裏一体を成す関係を形作るわけである。その場合、自己の中に見出される依存性や相剋性は、いずれも意識内の想像上の地平で生み出されるので、そのような特性は、想像力によって歪められた所産であると言える。自己の他者に対する関係は、その結果、「だまし合いの上で築かれたもの」⁽⁶⁵⁾となり、そうした偽善的な対人関係は、想像力によって維持されることになる。そこで次に、社会における人間関係の特性を明らかにするために、想像力の働きを考察することが要件となる。

想像力は理性に訴えるのではなく、むしろ「理性の敵」⁽⁶⁶⁾として人間の判断力を支配するので、仮象の秩序を人間社会の中に正しく位置づけることはできない。実際、誤謬の原理として働く想像力は、虚偽の価値基準を日常生活の中に設定し、人間の判断力自体を麻痺させてしまうことになる。したがって、人間関係の中に暫定的に設けられた仮象の秩序は、決して正当な存在根拠を備えているのではなく、虚構の支配力として君臨しているに過ぎない。

パスカルは、「想像力」と題する断章の中で、人間社会における価値規範の創造という点に想像力の機能を認めている。そこでは、法官たちの権威の根拠が上げられ、その権威は、「想像力に訴える」⁽⁶⁸⁾価値規範によって維持され、決して本当の権威を示してはいないことが説明される。すなわち、法官たちが身につけている服装は、民衆が抱く想像力と結びつき、虚構の権威がそこから生じてくる。そして、その権威は、新たな価値規範

を伴い、民衆の意識の中に定着するのである。その際、法官の服装は、単なる装飾品として表わされるのではなく、民衆の尊敬という集団的な価値意識を喚起させる象徴的な記号として機能することになる。しかも、そのような価値意識は、恣意的な過程を通じて形成されるのではなく、民衆の間で認められている社会的な通念を含み、想像力は、そうした価値意識を維持する働きを日常生活の中で行うことになる。実際、法官たちの「つまらぬ道具だて」⁽⁶⁹⁾の中に、虚構の権威を民衆に認めさせる社会的な通念がなければ、彼らの服装は、単なる飾り物としてしか機能せず、民衆の尊敬を表すような社会的な価値意識を生み出すことはないだろう。そして、単なる事物に、そのような価値意識を付け加え、それを民衆の意識の中に独自の価値規範を植えつける働きをするのが想像力に他ならない。

想像力はまた、法官の権威に見られるような想像上の価値体系を民衆の意識の中に導入するばかりではなく、現実社会の中に仮象の秩序を定着させることにより、存在基盤が欠落した人間関係を支える機能をも果たしている。その場合、仮象の秩序は、一種の統治手段として、現実社会の中に設定され、虚構の価値体系を含む「想像力の綱」⁽⁷⁰⁾ des cordes d'imagination により、現状が維持されていく。したがって、想像力は、民衆の価値意識を生み出すばかりではなく、人間社会の基盤をも維持する原理として重要な働きをすることになる。

しかしながら、現状を維持している仮象の秩序は、想像力に依拠しているけれども、想像力の方は、誤謬の原理として、人間の判断力を麻痺させる機能を持っていることも忘れてはならない。仮象の秩序は、そのため、矛盾した支配体制を形成し、民衆の意識は欺かれた状態に置かれることになる。社会体制を支えている本当の機構は、想像力によって民衆の目に覆い隠されているために、彼らの判断力の真の対象とはなりえないのである。そこで、現実社会を構成する様々な制度は、想像力の社会的な機能によってその法的根拠が維持されるとともに、習慣によって定着することになる。

実際、社会秩序を規制する法律は、習慣の特性のために、その存在価値

が保証され、しかもその価値は、普遍的な効力を持つわけではなく、相対的な機能を果たしているに過ぎない。パスカルは、具体例として、地理的区分によって設定された正義の不合理性を取り上げ、習慣の性質を次のように説明している。

すなわち、正義や法律の存在理由は、時代や地域によって異なり、時には「川1つで仕切られる滑稽な正義」⁽⁷¹⁾さえ、見出すことができる。普遍的な正義を想定することができないために、社会制度の成立原理は、全く恣意的な方法に依存することになる。そして、様々な正義や機構の法的根拠を規定づけているのが習慣であり、その特性は、「それが受け入れられているという、ただそれだけの理由で、公平のすべてを形成する」⁽⁷²⁾という点に認められる。しかも、習慣の導入は、必然的な根拠に従ってなされるのではなく、地理的な条件や時代の偶然的な要素に左右される傾向がある。社会制度は、そのために、ただ習慣の様々な形態によって任意に設定され、日常生活の中に定着することによって、妥当な制度として容認されてしまう。パスカルが人間社会の中に「権威の神秘的基盤」⁽⁷³⁾を見出しているのは、そうした習慣の特性の中に他ならない。

こうしてみると、習慣の支配は、新たな社会機構を作り出す点において、想像力と同じ働きをしていることがわかる。確かに、パスカルは、習慣ばかりではなく、想像力に関しても、「すべてを左右する」⁽⁷⁴⁾ために、両者の相違点はほとんど見られないように思われる。しかし想像力は、ある限られた社会の中で広く容認されている規範に基づいて、価値観を現実社会の中で創造するのであり、そうした社会的な規範から逸脱してその効力を表すわけではない。そして、社会的な規範を日常生活の中に導入し、定着させる働きをするのが習慣であり、想像力は、習慣によって設定された社会的な規範に従って、現実世界の中に新たな価値観を生み出すことになる。すなわち、習慣と想像力は、それぞれ、新たな社会機構を作り出し、それを全面的に支配するけれども、両者は、必ずしも同じ働きを示すわけではないのである。

習慣の働きは、こうして、日常生活を規制する社会制度ばかりではなく、想像力の機能において顕著に見られるように、人間の意識の判断作用そのものにまで及ぶことがわかる。日常生活における潜在化した様々な慣例に関する思考様式の枠組までも、習慣によって形成されてしまうからである。裁判官に対する尊敬の感情も、確かに想像力の働きに依存しているけれども、その感情は、習慣の働きによって定着した価値規範を媒介として生ずると言える。

パスカルが眺めた人間社会は、以上のような仕組を備えていることが理解される。それでは、その仕組を解明するために、パスカルはどのような方法を提案しているのだろうか。新たな方法論的視座を見出すためには、人間社会に固有な諸現象を相対化し、より包括的な観点から「全体性の探求」⁽⁷⁵⁾へ向かうことが要件となる。

そこで、パスカルは、「正より反への絶えざる転換」renversement continu⁽⁷⁶⁾el du pour au contre という弁証法を想定して、人間社会の仕組みを捉える有効な手掛りを示している。様々な人間的な事象は、多くの複雑な要因から構成されているので、現行の社会的通念と同じ視点だけを保持する限り、それらの事象を十分に解明することはできない。したがって、社会的通念の価値そのものを乗り越えることが要請される。

パスカルは、民衆の意見が成立している社会的通念の擬制を次のように否定する。まず、「われわれは、人間が本質でないものを尊重するという点から、彼が空しいものであることを示した。そして、これらのすべての意見は破壊された」⁽⁷⁷⁾と、述べられているように、民衆の常識や社会的通念そのものが否定される。しかし、パスカルは、「民衆の意見」を全面的に排斥するのではなく、社会の基盤を構成しているのは、否定された「民衆の意見」でもあることに注目する。どんなに不合理な社会的通念であったとしても、その通念が社会の基盤を成している以上、早計にそれを斥けるわけにはいかない。パスカルは、そのために、「ついでわれわれは、これらのすべての意見が、極めて健全であり、したがって、これらすべての空

しいことも極めてよく基礎づけられているので、民衆も人の言うほど空しいものではないことを示した。こうしてわれわれは、民衆の意見を破壊した意見をさらに破壊した⁽⁷⁸⁾と、付け足すのである。確かに、社会的な通念を成す「民衆の意見」は、社会の基盤を支える役割を果たしている。しかしながら、民衆の意見は、そのために、無条件に肯定されるわけではないことも認めねばならない。したがって、パスカルは、社会の大部分を構成している民衆について、次のように書くことになる。すなわち、「今度は、この最後の命題を破壊して、民衆の意見は健全であるにしても、民衆が空しいものであることは、相変わらず本当であることを示さなければならない。なぜなら、民衆は、真理をそのある場所において感知せず、真理のない場所に真理を置いているので、民衆の意見は常に極めて誤っており、極めて不健全であるからである⁽⁷⁹⁾」と。

こうして、相反する命題を積み重ねることにより、事態の本質が次第に明らかにされ、人間社会の価値規範そのものの正当性が問い直されることになる。パスカルは、その場合、人間社会の価値規範を成す正義と力の相関関係を具体例に取り上げて、社会の本質を次のように洞察している。

すなわち、民衆を支配するためには、どのように矛盾した方法を用いたとしても、虚構の社会秩序を想像力の働きを通じて正当化することが求められる。しかしその社会秩序には、力による力の支配という統治方法が認められ、そうした方法が、社会体制全体を維持する機構を形成していることを見逃すわけにはいかない。力に依存した支配機構は、それ自体、極めて「圧制的な」⁽⁸⁰⁾ tyrannique 機構であり、しかも正義は、「力の支配」⁽⁸¹⁾に対して全く効力を持たず、ただ力に従属する相対的な価値規範を備えているに過ぎない。「この世の暴君」⁽⁸²⁾である力が、統治体系の基盤を形成し、正義は、その存在根拠が稀薄であるために、強力な統治手段とはなりえない。正義は、決して普遍的な指標を含んでいないので、「論議無用」⁽⁸³⁾な力が正当化され、社会秩序が維持されることになる。パスカルは、こうして、正義やそれに依拠した法律の価値を徹底的に批判し、社会制度をただ力の支

配だけによって説明するのである。したがって、そこには、ゴールドマンが指摘しているように、「無政府主義者」⁽⁸⁵⁾に類似した発想を見出すことができる。しかし、パスカルは、ただ現状の矛盾を批判するだけではなく、人間社会の諸現象を正確に捉える視点をも提供していることに注意する必要がある。

人間の判断力は、想像力や習慣の働きによって、著しく歪められるために、力の支配によって成立した社会は、民衆の目には決して不合理で「圧制的な」⁽⁸⁶⁾世界として映るのではなく、合理的な秩序として彼らの日常生活を維持している。確かに、人間社会の中に認められる法律や正義は、それ自体、何ら特別な存在理由を備えているわけではなく、「あまりにも弱くて軽いもの」⁽⁸⁷⁾である。しかしながら、民衆の意識の中では、それらは統治機構の指標として、妥当な価値基準を持っているように見える。社会秩序に関するこのような2重の視点は、一方では、真の統治機構を知らない民衆の判断の誤謬性を示しているとともに、他方では、現状を維持する上で、重要な働きをしていることを表している。しかし、正義を力に置き換えた統治機構は、「真正の法」⁽⁸⁸⁾を所有していない民衆の立場から導き出されているので、力に支えられた現実社会は、必ずしも理想的な状態を示しているわけではない。既成の秩序を無条件に受け入れている民衆は、「真理のない場所に真理を置いている」⁽⁸⁹⁾虚構の世界にいたのである。

しかしながら、パスカルは、現実社会を構成しているそうした存立基盤をただ批判的に検討しているわけではない。確かに彼は、社会秩序の不合理性や脆弱性を指摘しているけれども、その秩序は現実世界から排斥されるべきではなく、現状を維持する重要な効力を持っているのである。したがって、彼の政治観には、現状の社会秩序の虚構性を重視する保守的な態度を認めることができる。現実社会の崩壊を防止するためにも、本質的には不合理な社会秩序であっても、その秩序を容認することが必要となる。パスカルが、法律の矛盾を民衆に示す危険性を指摘しているのも、「保守的な擬制」⁽⁹¹⁾⁽⁹⁰⁾に維持されている現実社会の秩序を重視しているためである。

しかしながら、人間社会に対するパスカルのそうした洞察を知るだけでは、彼の本当の意図を理解することは困難であろう。実際、パスカルは、様々な社会秩序に属した人間を例に取り上げて、自分の方法論を次のように説明しているのである。

まず、第1段階では、現実社会の価値規範が提示される。そこでは、信じやすい民衆が、「現象の理由」Raison des effets を知らずに、「高貴な生まれの人々を敬う」⁽⁹²⁾ことが述べられる。第2段階では、「生半可な識者たち」demi-habiles⁽⁹³⁾の皮相な態度が問題となる。彼らは、出生は「偶然」⁽⁹⁴⁾に基づくとして民衆の意見を軽率にも批判するのである。したがって、「生半可な識者たち」は、民衆が日常生活で従っている既成の習慣を十分に理解してはいないことになる。すなわち、たとえ彼らは、「後ろ側の考え」une pensée de derrière⁽⁹⁵⁾を持っていたとしても、民衆の次元で判断しているわけではないのである。第3段階では、「識者たち」habiles⁽⁹⁶⁾は、「後ろ側の考え」に依拠すれば、高貴な人々は決して敬われることはないけれども、民衆と同じように、高貴な人々を敬う必要性を認めている。したがって、「識者たち」は、「後ろ側の考え」を現実社会では正しく用いていると見なすことができる。第4段階の「信仰家たち」dévots⁽⁹⁷⁾は、高貴な人々を軽蔑するので、第2段階における「生半可な識者たち」の態度と、外見上類似しているように見える。しかし、「信仰が彼らに与えた新しい光」⁽⁹⁸⁾を持っているので、「信仰家たち」は、高貴な人々を敬う「識者たち」と同じ立場に置かれているわけではない。「信仰家たち」は、こうして、「生半可な識者たち」の態度の上に位置づけることができる。そして、最後の第5段階では、「正から反」⁽⁹⁹⁾へ至るパスカルの弁証法の到達点が示されることになる。「完全なキリスト者」chrétiens parfaits⁽¹⁰⁰⁾は、現実社会の高貴な人々を敬うので、その態度は、第1段階の「民衆」や第3段階の「識者たち」と類似しているように見える。しかしながら、「完全なキリスト者」⁽¹⁰¹⁾は、「他の一層高い光によって」par une autre lumière supérieure 物事を判断することに注目しなければならない。現実世界に対して超越し

た視点を確保し、しかも現実世界の存在基盤を相対的に捉える姿勢が、「完全なキリスト者」の発想方法を特徴づけることになる。その発想方法こそ、「正から反への転換」に基づくパスカルの弁証法を表しているわけである。

そこで、人間社会を批判的に捉えるパスカルの真意がどこにあるのかを、改めて問い直すことが必要となる。

力による支配は、現実社会を維持する統治手段として、ある程度まで有効性を備えている。しかしそうした支配形態は、真なる法律を人間が所有していないために作り出されたのであり、必ずしも社会の正常な特性を示しているわけではない。「正しいものを見出せないために、人は強いものを見出した」⁽¹⁰²⁾以上、力の観念は、むしろ、必要悪として提示されているのである。実際、パスカルは、社会を構成している人間の「あらゆる行動の源泉」⁽¹⁰³⁾の中に、「邪欲と力」⁽¹⁰⁴⁾を認めている。「人は邪欲から政治や道徳や裁判について素晴らしい規則を作り出し、引き出した」⁽¹⁰⁵⁾という文章は、人間社会の中に正当な基盤を求めることができないことを示しているのである。そして、「邪欲」la concupiscence から導き出された社会制度を維持するのが、力の働きに他ならない。こうしてみると、力による支配は、人間自体の矛盾を反映した性質を帯びていることがわかる。したがって、パスカルを、単純に無政府主義者や保守主義者と見なすことは、彼の真意を正確に理解することにはならないだろう。力と正義の矛盾した関係が意義を持つのは、法の真偽を見分けることができず、しかも既成の法や正義をただ盲目的に維持することしかできない「神なき人間」l'homme sans Dieu⁽¹⁰⁶⁾の視点においてである。パスカルは、現実社会の矛盾やそこにおける人間の不合理な行動を強調するために、現実世界を暴く弁証法を採用したことになる。すなわち、「正から反への転換」によって明らかにされた人間社会の諸現象は、人間自身に内在した「邪欲と力」が法律や正義のような価値規範に反映していると考えられる。社会制度の様々な矛盾や不合理性は、ここにおいて、歪められた人間性と密接に結びついていることがわかる。

そうした相関関係を顕在化させることにこそ、パスカルの方法論の独自の意義を見出すことができよう。

注

- (1) Pascal: *Préface sur le traité du vide, Œuvres complètes*, présentées par L. Lafuma, Paris, Seuil, 1963, p.230.
- (2) *Ibid.*
- (3) パスカルは、特に神学について、権威の重要性を指摘している。その理由は、「そこでは、権威が真理と不可分の関係にあり、われわれは権威を通してのみ真理を知りうるからである」(*Ibid.*)と。
- (4) 例えば、パスカルは、ガリレオの望遠鏡の発明により、新たな事実が発見されたことを取り上げて、真偽の判定基準そのものが変更することを述べている。すなわち、「今や望遠鏡の与える利益によって、われわれはそこに無数の小さな星を発見し、そのあまりに豊かな光輝が、あの白い真の原因であることを知らされたのであるから、同じ観念にとどまることは容赦されないであろう」(*Ibid.*, p.232)と。
- (5) Pascal: *De l' esprit géométrique, op. cit.*, p.348.
- (6) Edouard Morot-Sir: *La métaphysique de Pascal*, Paris, P.U.F., 1973, p.15.
- (7) Pascal: *De l' esprit géométrique, op. cit.*, p.356.
- (8) *Ibid.*
- (9) *Ibid.*
- (10) Edouard Morot-Sir: *Pascal*, Paris, P.U.F., 1973, pp.22-23.
- (11) Pascal: *De l' esprit géométrique, op. cit.*, p.356.
- (12) *Ibid.*
- (13) *Ibid.*
- (14) *Ibid.*
- (15) *Ibid.*
- (16) *Ibid.*, p.357.
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.*
- (19) *Ibid.*
- (20) Paul Foulquié: *Dictionnaire de la langue philosophique*, Paris, P. U.F., 1969, p.156.

- (21) Pascal: *De l' esprit géométrique*, *op. cit.*, p.350.
- (22) *Ibid.*, p.357.
- (23) *Ibid.*, p.349.
- (24) *Ibid.*, p.350.
- (25) *Ibid.*, p.349.
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*, p.350.
- (28) *Ibid.*
- (29) Pascal: *Pensées*, *op. cit.*, p.512. 断章L・110-B・282。なお『バンセ』
Pensées からの引用は、ラフュマ版Lafuma（以下L・と略記）とブランシュ
ヴィック版 Brunschvicg（以下B・と略記）をそれぞれ記す。
- (30) *Ibid.*
- (31) *Ibid.*
- (32) Jean Mesnard: *Les Pensées de Pascal*, Paris, SEDES., 1976, p.88.
- (33) Pascal: *De l' esprit géométrique*, *op. cit.*, p.351.
- (34) *Ibid.*, p.350.
- (35) *Ibid.*
- (36) Lous Marin: *La Critique du discours, sur la Logique de Port-Royal
et les Pensées de Pascal*, Paris, éd de Minuit, 1975, p.263.
- (37) Pascal: *De l' esprit géométrique*, *op. cit.*, p.356.
- (38) Edouard Morot-Sir: *La métaphysique de Pascal*, *op. cit.*, p.18.
- (39) 断章L・697-B・383.
- (40) Edouard Morot-Sir: *Pascal*, *op. cit.*, p.23.
- (41) Pascal: *De l' esprit géométrique*, *op. cit.*, p.351.
- (42) *Ibid.*, p.350.
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*, p.351.
- (45) 断章L・188-B・267.
- (46) Pascal: *De l' esprit géométrique*, *op. cit.*, p.354.
- (47) 例えば、断章L・597-B・455, 断章L・688-B・323, 断章L・978-B・100.
などに自己の特性が述べられている。
- (48) 断章L・688-B・323.
- (49) *Ibid.*
- (50) *Ibid.*
- (51) 断章L・806-B・323.

- (52) 市川 浩『精神としての身体』, 勁草書房, 1975年, 88頁。
- (53) Edouard Morot-Sir: *La métaphysique de Pascal*, *op. cit.*, p.96。
- (54) 断章L・688-B・323。
- (55) 断章L・135-B・469。
- (56) 断章L・143-B・464。
- (57) 実際, パスカルは, 「父親たちは, 子どもたちの自然な愛が消えてしまいはいないかということを恐れる。では, 消えることがあるようなこの自然性とは, いったい何だろう。習慣は第二の自然性であって, 第一の自然性を破壊する。しかし自然性とは何だろう。私は, 習慣が第二の自然性であるように, この自然性それ自体も, 第一の習慣であるにすぎないのではないかということを大いに恐れる」(断章L・126-B・92) と述べて, 人間の自然性が先天的に備わっているものか, それとも後天的に形成されたものであるのかを疑問視している。
- (58) Edouard Morot-Sir, *op. cit.*, p.96。
- (59) 断章L・978-B・100。
- (60) *Ibid.*
- (61) Hobbes: *Leviathan*, Oxford, 1967, p.96。
- (62) 断章L・597-B・455。
- (63) Edouard Morot-Sir, *op. cit.*, p.96。
- (64) 断章L・597-B・455。
- (65) 断章L・978-B・100。
- (66) 断章L・44-B・82。
- (67) *Ibid.*
- (68) *Ibid.*
- (69) *Ibid.*
- (70) 断章L・828-B・304。
- (71) 断章L・60-B・294。
- (72) *Ibid.*
- (73) *Ibid.*
- (74) 断章L・44-B・82。
- (75) Lucien Goldmann: *Le Dieu caché*, Paris, Gallimard, 1955, p.206。
- (76) 断章L・93-B・328。
- (77) *Ibid.*
- (78) *Ibid.*
- (79) *Ibid.*
- (80) 断章L・103-B・298。

- (81) 断章 L・665-B・311。
- (82) *Ibid.*
- (83) 断章 L・86-B・297。
- (84) 断章 L・103-B・298。
- (85) Lucien Goldmann, *op. cit.*, p.311。
- (86) 断章 L・103-B・298。
- (87) 断章 L・60-B・294。
- (88) 断章 L・86-B・297。
- (89) 断章 L・92-B・335。
- (90) 断章 L・66-B・326。
- (91) Albert Béguin: *Pascal par lui-même*, Paris, éd du Seuil, 1952, p.87。
- (92) 断章 L・90-B・337。
- (93) *Ibid.*
- (94) *Ibid.*
- (95) 断章 L・91-B・336。
- (96) 断章 L・90-B・337。
- (97) *Ibid.*
- (98) *Ibid.*
- (99) *Ibid.*
- (100) *Ibid.*
- (101) *Ibid.*
- (102) 断章 L・86-B・297。
- (103) 断章 L・97-B・334。
- (104) *Ibid.*
- (105) 断章 L・211-B・453。
- (106) Jean Mesnard: *Pascal*, Paris, Desclée De Brouwer, 1965, p.93。